

### Contents

第7回アジア太平洋地域エイズ国際会議 (7th ICAAP) を終えて .....	1
難しさと向かうこと (06) .....	6
第5回総会・活動報告会開催 .....	9
ティーンズ・クリニック@銀座 開始 .....	11
活動報告 .....	12
制作物の紹介 .....	15
お知らせ .....	16

## 第7回アジア太平洋地域エイズ国際会議(7th ICAAP)を終えて

「イントロダクション 開会式を中心に」

宮田 一雄

舞台の下手袖から黒いカーテン越しに客席を覗く。一階はほぼ埋め尽くされようとしている。スクリーンには、ふれいす東京から提供されたビデオ「POSITIVE VOICES」が流れていた。このビデオが終われば、開幕まであと10分。

「どうでしょう。2階も開けますか」

開会式会場の神戸ポートピアホールは客席数1702。歩いて5分足らずの神戸国際展示場からも、準備を終えたブース出展者が続々とホールに向かっていているという。

「2階も入れてください」

「パルコニーも開けよう。これは立ち見が出ますねえ」

「5分ほど開始を遅らせましょう」

無線で連絡を取りながら、開会式スタッフに次々と指令が飛ぶ。

大変なことになった。会議に対する熱い期待が客席から伝わってくる。スクリーンの映像が国連開発計画(UNDP)制作の「生きるよろこび 静かなる嵐続編」に変わった。7分ほどの映像が終われば、開会式が始まる予定だったが、スタートは結局、10分間遅らせることになった。

2005年7月1日午後5時10分、第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議はついに開幕の時を迎えた。会議は当初、2003年11月に開催の予定だったが、SARSの流行の影響を懸念し、延期された。アジア・太平洋地域のHIV/エイズの流行が急速に拡大しているまさにその時期に、地域会議の不在は何を意味するのか。延期は組織委にとって苦渋の決断だったが、エイズとの闘いの現場からは厳しい批判の声もあがった。

「会議が延期されている間にも多くの方がエイズで亡く

なっている」

そんな指摘もあった。組織委も批判は十分、認識している。だから、会議は何としても開かなければならない。治療の普及と予防対策の拡大を通してアジア・太平洋地域のHIV/エイズの流行を抑え、縮小へと転じることは今後の地球規模のエイズ対策の最重点事項であり、その転換点が2004年7月にバンコクで開かれた第15回国際エイズ会議であり、一年後の神戸ICAAPだった。

だが、一方で日本国内のICAAPに対する関心は冷淡なほど低く、政治や経済の指導者の支援もあまり期待できなかった。組織委は孤立感を味わいながら、会議の準備を進めてきた。流れが少し変わってきたのは2005年に入ってからで、1月末に昨年の国内のHIV感染者・エイズ患者の新規報告が年間千人の舞台をはじめて超えたことが明らかにされ、4月には累積報告も一万人を超えた。厚生労働省もこのころから、会議を本気でバックアップしなければならないとの判断に傾いていったのではないかと。もっと早い時期から、バックアップではなく、主体的に会議に関与してほしかったという思いも残るが、まがりなりにも政策的意思が示されたことは一応、評価できる。

話が少し脱線したが、私は組織委の文化プログラム委員長として開会式、閉会式、期間中の文化行事を担当し、財政難による度重なる予算カットの要請には涙と不安で夜も眠れない日が続いた。このため、開会式も、オープニング演奏の費用は他から工面し、司会はJaNP+代表の長谷川博史さん、ふれいす東京代表の池上千寿子さんのお二人にお願いし、映像はふれいすとUNDPから借り...と相当、セコイプランを考え出し、「主役は誰なのか。そのメッセージが明確に届くよう、あえて手作りの開会式を目指しました」などと言い

張って一気に押し切る覚悟だった。

いわば、がけ縁の開会式だったのだが、怖いというか、素晴らしいというか、開会式はこうした私の思惑や計算などやすやすと乗り越え、盛り上がりで盛り上がって会議の成功に大きな貢献を果たすことができた。

オープニングの演奏は最初の和太鼓のソロからがんがん飛ばし、尺八を担当した国立感染症研究所、岸本寿男ウイルス第1部第5室長が「リハーサルでもこんなにうまく呼吸が合ったことはなかった」という名演奏だった。

長谷川さんと池上さんは、立ち見を入れると2000人を超えたと思われる大観衆を前に最高のホスト役を果たした。私は司会席の背後の舞台袖に座っていたのでよく分かるのだが、「いったい、この人たちの本職は何だ」と疑いたくなるような鮮やかな手際で、軽やかに式の進行を楽しむ余裕すら見せていた。

会議のハイライトとなったセブンスターズ(アジアエイズ関連NGO連合)の登場場面では、35人ものメンバーが舞台に上がり、インドネシアのフリッカ・チア・イスカンダールさんがスピーチを行った。

「私はここに立って、HIVに感染していることを明らかにし、偏見や差別にさらされるようになることをおそれています。それでも私はここに立っています。なぜなのでしょう。人間として闘いたいと思うからです。もしも私たちが偏見や差別を避けて通ろうとするなら、それでどうやって偏見や差別と闘うことができるのでしょうか」

23歳の女性とは思えないなど書いたら、23歳の女性の激しい抗議を受けるだろうが、ついつい、そう書きたくなくなってしまうほど、フリッカのスピーチは力強く、心を揺さぶった。

日本のHIVコミュニティを代表して長谷川さんがフリッカを抱擁し、そして「ここに集まった人々はみな、小さなウイルスとの大きな闘いに立ち向かっている仲間です。今日から5日間、さまざまなギャップに橋を架けるために有意義な議論が繰り広げられることと思います」と歓迎のあいさつを行った。

客席後方のドアは開いたままで、ホールに入りきれない人が背伸びをして拍手している。やったぞ、長谷川さん。この会議は成功するぞ。舞台の袖で私もまた、何だか激しく感動してしまっただけで、演奏も司会もフリッカのスピーチも素晴らしい。式の途中で一

部、困ったちゃんの演説も見受けられたが、それも結果として組織委の苦勞の大きさをアジア・太平洋地域のHIVコミュニティに広く知らしめる絶妙の舞台装置となっ



司会は池上代表とジャンププラスの長谷川さん



舞台上上がったフリッカさんとセブンスターズの35名のメンバー

た。長谷川さんは会議の間中、知っている人からも、知らない人からも「素晴らしい」と握手攻めにあった。

乗っているときはこんなものだろう。冷や汗ものではあったが、ここはひとまず、運も実力のうちと考えたい。ただし、蛇足を承知で付け加えれば、いつも運に恵まれ、急場しのぎでやっていけるわけではない。今回の会議は追い風に恵まれ、窮地を脱したものの、HIV/エイズの流行はますます広がっていきこうとしている。運頼みやその場しのぎでないエイズ対策がこれからはますます必要になることは改めて肝に銘じておきたい。

「神戸会議～自分のスタンスと方向性の発見」

川名 奈央子

Great!

初めてHIV陽性者としてHIV/AIDS国際会議に参加した私の気持ちを表すとすれば、この一言に尽きる。今回ICAAPに参加したことで、ここ数年考え続けていた、自分のスタンスや方向性がすごくクリアになったからである。そのきっかけになったICAAPでの体験は4つある。

ひとつはICAAPに先立ち、6月30日に開かれたアジア・太平洋地域PLWHA会議。第15回国際エイズ会議と同時に開かれた第2回会議で出された『バンコク宣言』をもとに、日本の現状分析とアクションプラン作りをしてみると、GIPA\*が全く実践されていないことに改めてショックを受けた。でも、今回は落ち込むだけでなく、インドや韓国のPLWHA(HIV陽性者)と議論を交わすことで、「今の状況を私たちPLWHAがイニシアティブをとって変えていくことができるのだ」と思えたことが、私にとって目の覚めるような体験だった。PLWHAとして自分はそういうことをしていきたいのだと、改めて自覚した瞬間でもあった。

そして、2つめの「きっかけ」でもあるSusan Paxtonの『Positive Advocacy Workshop』で、その『How(どうやって)』を考えるヒントをたくさんもらうことができた。JaNP+では、すでにポジティブ・スピーカーのトレーニング・モジュールが作られているが、これからは自分もこのような分野に関わっていきたくて強く感じた。

3つ目の「きっかけ」は、思いがけず、UNAIDSのPeter Piot氏やWHOのJack Chow氏、インドのPLWHAである友人2人とともに、記者会見をしたこと。会見開始の15分前に「できたら話して」と言われてびっくりしたが、自分の考えをちゃんと伝えることの大切さと難しさを実感したし、それをきっかけに国内外のメディアのインタビューを受けたことで、自分の考えやスタンスを明確にし、整理することができた。

そして、4つめの「きっかけ」は言うまでもなく、たくさんさんのPLWHAと出会って、お互いの活動はもちろん、恋愛や人生などいろんなことを話したこと。これから、HIV/AIDSに関して活動をしていくうえで行きづまることがたくさんあるだろう。でも、彼らとコミュニケーションをとり続けていくことで、それらを乗り越えていけると思った。

得るものの多い6日間だったが、これは始まり。これからこの会議で得たことを実践していかなければ意味がない。今は気合いが入っているから、心が急いでしまうけれど、

「Take it easy and go slow」という、今回の会議で出会った大好きなPLWHAのこたばを心に留めて、少しずつ確実に変化を起こしていきたい。

\* HIV陽性者の、より積極的で広範な社会参画の促進を謳った考え方。

## 「サテライト・シンポジウム報告」

東 優子

会議3日目にあたる7月3日(日)の午後1時より、サテライト・シンポジウム「知識から意識へ～HIV予防介入の実践とその評価」(『若者の性の健康』をテーマとする研究成果発表会〔厚生労働科学研究費(エイ



エイズ予防財団の島尾理事長(中央)、福原専務理事(左)を交えて

ズ対策研究推進事業)研究成果等普及啓発事業))が開催された。プログラムは、1)ピアってナニ、2)ピアによる教材と効果、3)映像教材『Let's CONDOMing』上映、4)自治体による当事者性を活かした取り組み、5)ぶれいす東京の若者グループ「ぶ PEP」による実践的活動の報告、であった。満席状態の会場(定員105名)からは、「知識から意識へ、というメッセージ性に魅力を感じた」という声や、「横浜会議以来ほぼ10年、ずっとこの問題に取り組んできたが、知識や意識が若い世代に浸透していかない現状をどう打破できるのか、悲観的な感想ももっている」といった意見、あるいは「性教育バッシングの中、工夫しながら取り組んでいる」といった現場からの報告などが聞かれ、盛況のうちに終了した。

また、同日午後6時半からは(財)日本性教育協会が主催するサテライト・シンポジウム「げんき・やるき・ほんき～世界(アジア)に学ぶ生き生きエイズ教育～」が開催され、約250名の参加をみた。プログラム内容は、1)アジアにおけるHIV/AIDSの動向(国連人口基金HIV/AIDS担当官・高井明子氏)、2)タイにおけるピア・ユース・プログラムの実践(チェンマイ大学教育学部教授・Dusit Duangsa氏)、3)フィリピン国営テレビ番組「XYZ」の試み(兵藤智佳)、4)フィリピンにおけるエイズ教育(フィリピン・デイリー・インクワイアラー紙コラムニストRina Jimenez David氏)、5)エイズ/性教育を元気にする3つの「き」の育て方(池上千寿子)であった。このシンポジウムは、セクシュアリティをめぐって異なる価値観がぶつかり合う中で、タイやフィリピンの実践例などから、「宗教的・文化的な壁を超える」ということを一つの目的としていた。前出の参加者のコメントにもあるが、バッシングに曝される中、日本の性教育の現場からは元気がなくなっているといわれることを背景としている。プログラムの一つであった、若い女性3人が(今回一部上映した「マスターベーション」など)様々な性にまつわる話題を提供する番組「XYZ」は、翌日の神戸新聞にも取り上げられるなど、最も大きな反響を得たようである。

しかし会場にいた日本のマスコミ関係者の一人は、「今回

の会議取材してみて、アジアもがんばっているかもしれないけど、日本の高校生もすごくがんばっていることを知った。もしかするとアジアよりも面白いことをやってるかもしれない」と感想を述べ、会場を去った。若者の才能とパワーは、社会の大いなる財産なのである。「ぶれいす東京」が長期にわたって取り組んできた課題「今の日本をとりまく難しさの中で『若者の性の健康』にどう取り組むか」のヒントは、ここにある。

## 「ユースフォーラムを中心としたICAAP雑感」

Rainbow Ring 柴田 恵

ボランティア指導者研修会について

ICAAPに先立って行われた、エイズ予防財団のエイズ・ボランティア指導者研修会からの神戸入りとなった。

この研修会では自分が普段接しているのとはちがう分野の情報に触れることができ、プログラム自体非常に有意義だった。特に、ぶれいす東京の矢島さんのお話は、自分が、セカンドカミングアウトされたときやHIV+の友達と接している時にしばしば感じていることを、あらためて言葉にしてもらえたように感じ、非常に感慨深かった。また、今回は学生枠が用意されていたため同年代の参加者が多く、色々な分野で活動している同年代のつながりができた。その後、ICAAPでさらに親交が深まった参加者や、個人的にメールのやり取りをしている参加者もいて非常に有意義であったように思う。

ユースフォーラムについて

そもそも、「ユース」「若者」というざっくりとしたくりには少し抵抗を感じたけれど、同年代で色々な取り組みをしているひとたちと一緒にフォーラムを作ったことがとてもよい経験になった。フォーラム全体の結論は、一言に「若者」といっても、立場も活動もさまざままだということ。そんな多様な主体がフォーラムを完成させる中でつながることができたこと自体が意味のあることではないだろうか。青臭くつまらない結論ではあるけれど、そのことを実感できたことは少なくとも自分には非常に意味があった。スピーカーの中には知っている人なのに少し立場として距離感を感じていた人もいたのだが、フォーラムについての話し合いをする中で、忌憚なく意見をぶつけあうことができた。顔見知りといった程度の関係ではなく、お互いの活動の原動力や深いところの気持ちを交換することができる関係を築くことができたように感じ、このことが今回のICAAP全体を通して、自分にとって一番意義のあったことだと思う。



三宮駅にもレッドリボン

## 「はじめての国際会議 ～草の根活動とのギャップ」

さとう いくお

神戸ポートピアホールは熱気に包まれていた。私は初めての国際会議で、期待と不安が交錯する。様々な国々の人々が一堂に会した第7回ICAAPの開会式、和太鼓と尺八のアンサンブルが、優しい音を醸し出し、心を揺さぶられる。各代表の挨拶に続き、厚生労働大臣のコールがあった時、私の感動は最高潮に達した。さすが国際会議と思った。…が、残念ながら大臣は公用のため来なかった。代読。何か無念。兵庫県の副知事の挨拶の冒頭で、血友病患者の父親の手記からの引用、確かに日本にとって薬害エイズの問題は忘れてはならないが、現状の感染拡大の問題には焦点があたっておらず、何かが違うと感じざるを得なかった。「セブンシスターズ」やHIV陽性者、その周囲の人々の輝きや力強さとのギャップを肌で感じた。素晴らしい開会式だっただけに、その温度差が少し残念だった。

サテライトシンポジウム「私たちのリアリティ」では、関西の高校での性教育の教師側とそのサポートをしたNPO法人との両方からの発表も興味深かったが、何よりも3人の女性陽性者の発表があり、アジアでの現状を報告してくれた。知識不足による家族からの差別、それを根気強く乗り越えた姿やメディアや医療現場での間違った認識を、女性の立場から訴えた。そのパワーは凄い感動を生んだ。また「元気・やる気・本気・エイズ教育」では、タイでの教育の地道な活動のこと。フィリピンでの宗教観から来る性的問題を上げることの難しさなど、問題は山ほどあり、現場サイドではひとつずつ困難を乗り越えようとしている。その力強さをも感じた。

本会議場では、カンボジア・ベトナム・中国の行政の関係者からの発表があり、様々な問題はあがあるが、順調に解決の方向に進んでいるという内容で、本当なの？もっと今でも差別や偏見があり、そこで闘っている人々がいるのではないの？と感じざるを得なかった。その中では、タイの大学の教育現場からの報告が、エイズを受け入れる社会に必要なこととして、情報と薬がある 受け入れられた愛がある 差別とスティグマがない、の3点を挙げ、更に「HIVだけでなく、貧困など周囲の問題と一緒に扱うことの大切さ、その問題を解決に導くファシリテーターの大切さ、地元発信の大切さ、パートナーシップの大切さ」を訴えていて、印象的でジーンときた。

5日間を通して感じたこと。それは私たち当事者周囲の人々の地道な活動が大切なこと。その渦を行政に響くまで届けることが、今こそ必要なことを痛感した。残念ながら、HIVに対する偏見や差別はまだまだあり、それは、IDU(薬物使用者)・MSM・セックスワーカー・女性・宗教・貧困などの問題と重複すると、更に厳しさは増しているのが現状である。地域のコミュニティから声を上げ、ひとつひとつ問題解決のための草の根活動をしていくしかないと思われたい神戸会議だった。

## 「スキルズビルディングの準備にかかわって」

兵藤 智佳

スキルズビルディングは、一般的な学術発表ではなく、参加型のワークショップを中心に現場に役立つ実践的なス

キルを身に付けるというかなり独自のセッションです。私は、準備委員として、また実行者としてもこのセッションに関わりました。特に、今回の目玉は、「日本語によるワークショップ」であり、ぶれいす東京は、そのうちのひとコマをもらい、「当事者の視点をどう政策に生かすか」というテーマで、手記リーディングによるワークを行いました。セッションの終了後には自治体のエイズ担当者から「このワークをやるのにはどれくらいの予算が必要ですか」と言われるなど、うれしい反響をもらっています。一方、メインの英語のワークショップでは、HIV陽性者自身がどのように薬にアクセスするか、どうやって雇用を確保し社会参加するのかといったセッションに参加者が多かったようです。その他には、MSM、IDU、セックスワーカーといった当事者グループでのネットワークの場としても使われていました。

国際会議は、それぞれの地域で起きていること知り、共有することが目的ですが、スキルズビルディングを含め、その場に集う人達が、ネットワークし、戦略をたてることも重要な意味です。今回の会議では、アジアでは薬物使用者たちが、現在、自分たちの力でハームリダクション\*に関する政策を実現していることが成果としてあちこちで報告されました。マイノリティの感染の危険がどうして高いかはすでにわかっています。「なにをすればよいのか」を考えるにあたって「どうしてそうなるのか」の分析はもちろん重要です。しかし、何をすればいいのかがすでにわかっていることについては、「いかにしてやるのか」こそが議論されなくてはならないと思います。個人のエンパワーメントの重要性は言うまでもありませんが、行政を始め実際の政策立案、実行のプロセスに主体的に関わっているアジアの活動家たちに学べることは沢山あると思いました。

\* 注射器の交換や、メサドンの提供などによって、薬物使用に伴うリスクなど、当事者がこらむる不利益を現実的に軽減するという考え方。

## 「7つのテーマからなるギャラリー」

～ kavcaap2005 より～

川崎 那恵

7th ICAAP に先駆けて6月30日から4日間、神戸アートビレッジセンターで kavcaap2005 が開催された。アート(表現)を通じてエイズについての必要な情報



Simple Days さまざまな想いが伝わっていく

とインパクトを伝えること、予防・治療・ケアへの理解と関心を深めることをテーマにした kavcaap。3年目の今年、映画上映やトークイベントには800人を越える来場があった。

その中で私は7つのテーマからなるギャラリー展示の1つ「Simple Days featuring LIVING TOGETHER PROJECT」を企画した。5m四方の空間をぐるりと囲む一枚の白い布には、HIV陽性者の長谷川博史さんと花井十伍さんの赤裸々な個人史が大きな社会の流れと共に描かれていて、その延長にインタビュー映像「POSITIVE VOICES」

(ぶれいす東京制作)が上映された。最後の布の白い部分には、長谷川さんと花井さんのメッセージが展示され、訪れた人たちにも布ピースに自分のメッセージを書いて貼り付けてもらえるようにした。

私がこの展示を通じて伝えなかったのは、HIV 陽性者がこの社会で一緒に生きているんだよ、ということ。そして、HIV と共に生きるようになってからもそれまでと同じように、色んなことを経験し、色んなことを考え、伝えたい想いや話せない想いを抱えながら生きている人たちがいるんだよ、ということ。そんな当たり前のことを伝えなかった。

日本社会で、HIV 陽性者たちが話したいことをさらりと話せる、そんな日常を手に入れるためにはまだまだ時間がかかるかもしれない。でも、時間をかけてじっくり展示を見てくれた人がたくさんいたことに希望を感じる。そして、もっと多くの人たちに HIV 陽性者の声を届けたい、そのために表現したいと強く思った。話せない想いをたくさん抱えていた私自身の願いを叶えるためにも。

### 「PWA ラウンジ

～アジア太平洋地域の陽性者を迎えて～

矢島 嵩

アジア太平洋地域の HIV 陽性者を歓迎し、交流、相互理解をすることが、神戸会議に参加する大きな目的でした。国ぐるみで歓迎するのが本来の国際会議のありかたなのでしょうが、少なくとも僕たち陽性者が両手を広げて「ようこそ」と言いたかったのです。

PWAラウンジの運営担当者の一人である僕は、陽性者が安心してくつろげるラウンジを運営することを使命としていました。安心できる環境とは、物理的に守られている空間であるということだけではなく、「受け入れられている」かつ「干渉されない」ことも意味しています。そのために、ラウンジを担当してくれるボランティアの人たちには、僕たち PWA 小委員会が準備した特別研修を受けてもらい、陽性者の多様性やリアリティーを、事前に感じてもらうことにしました。「安心できる PWA ラウンジとは」という問い自体が、まさに陽性者が安心して暮らせる社会のありかたを考える作業でもあります。多くのボランティアの皆さんが真摯に研修を修了して、そして、ラウンジ・ボランティアとして素晴らしい働きをしてくれました。

会期中、のべ数百名の HIV 陽性者がラウンジを訪れて、ある人は談笑し、ある人は休息をとり、ある人は情報交換に余念なく、ある人は会議の発表準備に集中していた。多くの方が複数回利用してくれて、居心地が良かったとの声を聞くことができました。

また、7月3日は JAPAN Day と称して、日本の HIV 陽性者によるお茶の会と、日本舞踊の会を開催しました。タイ、インド、オーストラリア、中国……いろいろな国の HIV 陽性者に一服のお茶を楽しんでもらいました。また、「鶴亀」という日本舞踊に、みなひととき釘付けになりました。余談ですが、「鶴亀」は長寿を祝う長唄ですが、長寿とは長命とは意味が異なり、長く生存することを長命といい、自分らしく人生を全うすることを長寿というのだそうだ。

治療アクセスも、社会環境も、政治体制も、人権意識も、驚くほど異なるアジア太平洋地域の HIV 陽性者たちを迎

えて、それぞれが向き合っている困難を想像しながら、ホスピタリティーとは何かということ、自分自身に問い直す機会にもなりました。

### 「ぶれいす東京ブース出展報告」

吉田 成美

国際会議には展示コーナーがあり、研究者のポスター発表の他、関係団体が活動を紹介するブースを出す事ができます。今回、「ぶれいす東京」としてブースを出展してきました。



ポスター展示会場

3 x 3 x 高さ 2.5 メートルの限られたスペースの中で、どのように「ぶれいす東京」を紹介するか。出展が会議直前に決まった事もあり、余り時間的余裕がない中でしたが、立体的な展示を心がけました。自由に持っていけるパンフレット類と、表紙のきれいな冊子類 (Living Together シリーズ、JaNP+ と共同制作した「服薬と生活」「ストレスとつきあう」など) や、和風のコンドームケース、ポストカードなどの「ビジュアル系展示物」を机上にディスプレイ。



市民開放 DAY に賑わうブース会場



ぶれいす東京のブースにて

レイ。奥のスクリーンには研究班にて開発中のビデオ“Let's CONDOMing”の抜粋などの映像を流しました。そして、「2006年 第20回日本エイズ学会学術集会開催決定！ 会長 池上千寿子」の垂れ幕も！

今回は国際会議であり外国からの来訪者が多く見込まれたため、事前に「英語要員」「日本語要員」として何人かの方にブースの対応をお願いしました。会議当日になると、予想通りアジアを中心とする各国の参加者が次々来訪。着物地を使ったコンドームケースは飛ぶようにはけていきました。「私は日本語要員ですから…」と言っていた方も、いつの間にか英語でしっかり対応。ある担当者などはタイの方からタイ語で挨拶されるほど国際的な雰囲気になりました。

実際の展示期間は7月2日から4日まででしたが、3メートル四方の空間に国境を越えた親善と交流の花が咲いた3日間となりました。

## 難しさと向かうこと

シリーズ第6回目は、地域の福祉事務所で先進的に免疫機能障害に取り組んでいる行政担当者のお二人にお話を伺いました。すべての福祉事務所で同じように問題意識が共有されているとは限りませんが、少なくともお二人のお話から、行政窓口を担当する立場で直面するさまざまな難しさが見えてきます。

聞き手：生島 嗣

### (06) 福祉事務所で免疫機能障害を担当して

“手続き” “相談” “プライバシー” さまざまな課題をめぐって

まずは自己紹介と、普段の業務でどんなことをされているのかということをお話いただけますか

[Kさん:(以下、K)] 区役所の保健福祉センター保健福祉課で身体障害者福祉司をしています。普段は身障の方の係りとして知的障害や精神障害も含めて、私の下にいる4人のケースワーカーとケアを担当しています。平成13年に着任してもう5年目になるんですが、免疫の方(免疫機能障害者)については、着任当初に前任から引継いで、プライバシーの兼ね合いもあるので一人で担当していました。区は5つ福祉事務所があるのですが、その中でも私が担当している地区が突出して免疫の方が多いということで、2年くらい前から今の体制になりました。

[Fさん:(以下、F)] ××区の福祉課、身体障害者相談係に勤務しております、Fと申します。よろしくお願ひします。いわゆるケースワーカーで、福祉司のもと担当地区を持っています。やはり××区でも数が増えてきたということもあって、昨年度から、地区担当がそれぞれ受け持って担当していくということになりました。さらに私自身は免疫機能障害を取りまとめるということなので、困難なケースなど、福祉司との間にたって調整していくということもしています。

一般には分かりにくいので、教えて欲しいのですが、たとえば手帳を取りに窓口に行く、役所の中ではどういう風に対応するのでしょうか？

[K] いくつか流れがあります。とにかく行ってみようということで直にご自身で相談にみえる方と、あらかじめ病院のソーシャルワーカーとかコーディネーターの方から、手帳(身体障害者手帳)や更生医療のことを聞いてから窓口を訪ねて来る方がいらっしゃいます。また、アポイントをとられて見える方と、逆に窓口に行けばすぐ担当に会えるだろうという形でお見えになる方といらっしゃいます。私どもに関して言うと、窓口でいらっしゃったときに、うまく担当の福祉司や地区のケースワーカーが居れば相談に入れますが、たまたま不在だったりすると、どうするかということになります。代理のもので話を受けるといったこともありますが、



も、個人の情報を拡散しないようにするために担当を限定している、アポイントがあるかないかでは対応に差が出てしまうということはありませんね。

アポイントをとっておくと利用者にもメリットがあるということですね。

[F] 事前に別室を用意するようなこともできますしね。

[K] 相談は 区も個別の面接室にご案内をしてこちらですべて行っています。窓口ってオープンのカウンターが多いですね。そうするといろんな相談の話が、周囲に漏れてしまいます。もちろん、これは免疫の方に限らず、手帳の一般的な相談だったり、高齢の相談でも同じことなんです。

手続きに関してですが、事前に必要な書類を準備していけばよりスムーズになるのですか？

[K] 身障手帳と更生医療も合わせて手続きということになると、手帳に必要な書類だけでなく更生医療の要否意見書などいろいろ必要になります。ある程度病院のソーシャルワーカーの方と話し合っておくか、あらかじめ直接お電話なりで問い合わせしてから来ていただくと、来所のタイミングにあわせてこちら準備ができますので、窓口に来ていただいたとき速やかに手続きができます。来所は一度のタイミングで終わらせたいという方も多いと思います。実は一度も本人が来所しなくても手続きは終了することはできるんですね。特に入院中のかたなんかは、病院のケースワーカーと直でやり取りして済ませることもあります。

[F] いきなり患者さんをよこすというような感じの場合もありますね。役所がやってくれるんでしょ、みたいな。電話一本あればもうちょっと対応がよく済むのになんていうことはあります。利用者の方も2度手間3度手間になってしまう。手ぶらで来られてもね。診断書とか用意してこられないと、写真は？とか、所得が分からないと更生医療なのかマル障(東京都の重度障害医療の通称)なのか分からないとか。病院の方でも「とにかく行きなさい」ではなくて、「こんな段取りで行くといいですよ」というようなことを言ってくれればと助かります。忙しくてとてもそんなところまでやってられないという実情もあるんでしょうけどね。

[K] 病院のソーシャルワーカーやコーディネーターとのコミュニケーションは大事だと思っています。「病院の言っていることと違う」とか結構トラブルがおきやすいんです。先日、拠点病院の方に、手続きのポイントを整理した資料をお渡ししました。ルールを全部は説明できないので、だいたいこんなところを注意しておいて

だけるといいかなというものです。われわれとしても仕事し易いですし、病院のほうでもポイントをつかんでもらうと良いんじゃないかなと。気づいた点は挙げていって、やりとりしてキャッチボールしていかなくちゃいけないかなあと考えています。病院のワーカーさんの生の声を聞くことは大事です。病院でHIVのことばかりをやっているわけではないので、効率的にできるようにするというのはお互いのメリットになると思うんです。それに利用者の方が、休みをとって、また次の休みに、もう一回といったことが実際に起きているので、それは何とかしたいです。ある意味パッケージサービスに出来るわけですから。

単純な疑問ですが、もしアポイントなしで窓口に行った場合、第一声カウンターでストレートに病気のことを言わなければならないものなのでしょうか？

[K] 私どものところで言えば、地区担当のケースワーカーとか福祉司が相談を受けるとしますので、ご病気のことをストレートに大勢人がいるときに言う必要はまったくありません。行政の窓口もある程度慣れてきていて、ストレートに言わなくても分かることが多くなっているのではないのでしょうか。

[F] こちらから、障害の手帳をお持ちですかとお聞きすることが多いのですけれども、どんなご相談でしょうねとか聞いているうちに、免疫機能障害だと分かった時点で別室へご案内をするということもあります。気がついたところで対処することになりますね。カウンターが込み合っていて、人によっては耳打ちをしてくれる人もいますし、ちょっとここでは、とついよどむような方もいらっしゃって、これはそうかなと気づくこともあります。

[K] カウンターにドンと座って、オープンにお話をされるかたもいらっしゃいまして、そういう方にも個室をご案内していますけど、逆差別だという人は今のところいらっしゃらないです。そのかたに他意があるかどうかは別にして、後々のことまでは考えていらっしゃるかどうかわかりませんので、そうなったときに、われわれとしても本人にとって不利益が生じないという判断に立たなければならないですからね。

プライバシーへの配慮についてですが、その後、利用者との連絡の際にはどのようにしているのでしょうか？

[K] 手帳取得後の利用者との連絡について、どういうことを望んでいるのかを、本人に最初に聞いてしまいます。例えば、役所の封筒ですと、ご家族に見られてしまう。特に障害福祉課とか、福祉保健センターとか、なんだこれはみたいなことになる。ということで、郵便物は自宅に送らないで病院のケースワーカーに送るようにしている場合もありますし、代理人が受け取りにくるようにしている方もいます。集合住宅のアパートなんかだと、郵便物がポストから出てしまっていることがありますよね。そういったことが気になる方もいらっしゃるんです。

[F] ××区でも、最初にご相談のときに、このことを誰が知っていますかといったことを任意で聞きます。郵便

物や電話についてもお聞きします。ご本人の希望に沿って、××区の障害福祉課の封筒を使う場合もありますし、ただの××区の封筒で課のコード番号だけが書いてあ



るものにもすることもあります。それから電話を希望される場合、何と名乗ったらいいのかを聞きます。免疫の方の場合、××区障害福祉課と名乗らずに、だいたい××区のFですという場合が多いですね。いずれも最初の段階で選んでもらっているんです。それと、手当やマル障についてはですね、××区では本庁で全部やっているので給付自体は給付の部署が行うんですが、利用者へのお知らせや、年度更新などにかかわる発送はケースワーカーが全部やります。どこにどういう封筒でどこに送るのかを把握しているのはケースワーカーですからね。

同居している家族などに告知をしている割合というのは半分くらいなんでしょから、みなさんの配慮はとても役にたっているのではないのでしょうか。

[K] 免疫の方だけで、前任者から引き継いで受け持った平成13年の初めは二十数名だったと思います。だからこういうことがやってこれたというのもあります。今は、常時50名以上で、転出や転入も多いです。区は5つの地区に分かれています。免疫の方は私が受け持つ地区が圧倒的に多いんです。人口比でも多いです。女性の方やご高齢の方も中にはいらっしゃいますが、ほとんどの方は働きざかりの世代の男性で、単身の方も多いです。区でも一戸建ての多い地域などは少ないですが、私どもの地区は単身で暮すには利便性もいいですし、匿名性も高いということでしょうか。

陽性者にとって個人情報で役所のどの範囲で管理されているのかというのが気になる場所だと思うのですが？

[K] 手帳はパスポートのようなものですので、たとえば区の手当や更生医療といった手帳に伴う行政のサービスというのは、手帳の発行とはまた別の手続きが必要になります。ですから本来、福祉事務所の窓口だけで完結しないものなんですけど、担当者を絞って簡単な個人票なんかで情報を集約して管理していくということにしています。世帯台帳という基礎資料はそれぞれの地区ごとに保管されていますが、先ほどお話しした宛先の留意リストとか、更生医療のリストなんかは私のほうで一元管理しています。また、アポイントなしで窓口に行くと、ケースワーカーも誰もいないというようなときに、他の者が対応することもあるとお話しましたが、お名前とか住所とか情報が拡散しないように私のほうに集約することになっています。しかし、平成10年にみんな緊張しながら始めたこういった対応が、ちょっとした気の緩みで信頼を失うことだってあり得るわけで、どんどん人数が増えていく中で、これからどうやっていくかという段階にはいつているかと思っています。

[F] 私どものところには、担当者が鍵を閉めて帰る専

用のキャビネットがあって、紙の資料としてそこですべて管理しています。普通は文書を管理する担当への引継ぎをして何年で処分ということをしているのですが、それはすべて私のところで処理するようにしています。それから、障害手帳をとると、××区の場合は障害福祉手当などのサービスをシステムで処理していくことになりませんが、免疫の方のデータは載せていないです。その代わり全部手処理で事務処理が大変になりつつあるので、どうしようかという話になっています。システムに載せるとなると、セキュリティの問題をどうするかということですね。誰が誰の情報にアクセスできるかということですが、基本的にはパスワードで部署ごとに管理していますので、障害福祉課のうちの係しかアクセスできないというシステムを組んでいくことになるだろうと思います。先ほどお話したように、通知やお知らせとかも含めて、連絡をする必要があるのですが、どのお知らせをどこへ届けるかというのは、システム上の対応をクリアできていないので、まだ手書きのままやっているということなんです。セキュリティが確保されたところで変更されていくのかなと思います。

手帳とマル障と更生医療だけではないケースもありますね。

[F] それは私のほうで全部とりまとめをしています。いろいろな福祉のリソースを取り持ってくるのが仕事ですので、それは当然だと思っていますが、そのときに何処まで情報開示をするかというのが問題になります。たとえば生活保護を受けていれば生保ワーカー、ホームヘルプを受けるのであればヘルパーといったぐあいに関係者が増えるわけです。そこはその都度、利用者の方とご相談ということになります。

[K] やはり、新しくサービスが加わる時には、やはり情報の取り扱いかた、たとえばヘルパーのかたに病気のことを伝えるかどうかといったことを、ご本人の希望を確認して進めることになりますね。人によって、病気について知っておいて欲しいという方もいらっしゃるし、誰にでも言う必要はないのではと考えているかたもいらっしゃるからです。

免疫機能障害を担当することになったころのことをお聞きしたいのですが、当時、戸惑いなどはありませんでしたか？

[K] ずっと福祉職をしてきて、脳血管障害の後遺症の人とか、知的障害とか視覚とか聴覚とか、いろいろなりハビリティとか、他の仕事に比べると、いろいろなかたと接してきたと思うんです。免疫の担当を引き継いだときも、こういう仕事に來ればいろいろな相談があるんじゃないかと予想はしていました。相談の内容自体は慣れてくるにしたがって分かってきたように思います。肢体不自由の方とか、聴覚とか視覚とかの障害がある方の場合、コミュニケーションが大変な方が多いんですけれども、免疫の方はそういうことがなくて、だいたい皆さんご自分で意思表示されていきますので、コミュニケーションをしながらやってこれたかなと思います。

[F] 私自身は身体障害が3年で、免疫を担当するように

なったのは2年目です。前任が中心になってやってきたのですが、数が増えたので分けましょうということになりました。私も興味というかこの障害に関して勉強したほうが良いなというのはありました。基本的には研修に出るのはOKですよという体制がうちの場合は作られているので、公務で出られます。あとは自分で本を読んで勉強したり、映画を見たりもしました。もともと偏見がなかったかといえば嘘になるんですが、まずイメージがわからなかったので、勉強しなきゃなと思いました。前任からこういう注意が必要だということで、受け継いで地区担当でこういう風にしましょうと生かしていることも多いですね。

同じ部署の中で温度差があったりすることはないのですか？

[F] 免疫の障害は、まだ、おおっぴらに言いづらい障害であるので、そうじゃないような世の中を、幾つかある内部障害のひとつに過ぎないようになっていかないといけませんよね。ですが、同僚のワーカー同士で話をしていて、自業自得なんじゃないかといった議論が出たこともあるんです。それはやっぱり違うんじゃないかって思います。自分はたまたまそうではないに過ぎないのですから。うまくいえませんが、みんな一緒に、何かしらの障害だとか病気だとかがあって、それが手帳に該当するのか、生活が困難とされるのか、といった程度の差に過ぎないんじゃないのかと……。そのワーカーも最近では随分違って来たように思います。実際に免疫の人と会ってみれば、自分となんら変わらないんだということが分かってくるわけですから。いっぱいケースを担当していくなかで気づいていくことも多いと思いますね。

他の区との間で、お互いどうしているかといった情報交換はあまりないんですか？

[K] すごく数が増えてきて対応をどうしたらいいかというのは、共通の課題にはなっているんです。けれどもそれを具体的にどう対応したらいいのかということまで整理しきれてないですね。比較的熱心に対応しているところだとか、興味関心を持っているところはあるので、任意団体ですが障害者福祉司会ではそういった情報交換を草の根的にやってはいます。ただ、免疫の方に関してどういう相談支援をする必要があるかといった研修をするところがあるといいですね。医療職はある程度あるわけですが、ケースワーカーを対象にしたものはないんですよ。専門の職種の配置換えがどんどん進んでいるので、都道府県の身障センターとか、あるいは行政職を対象とした研修を年に何度か組んでもらうとかですかね。慣れたケースワーカーさんもいる一方、福祉司も大勢入れ替わっているんです。役所ですからいろんな部署からいらっしゃるんです。そういう中で動いているものですから、たまたま今日は 区と××区ということで、経験者同士が話していた部分がありますが、実際は「そうは言っても」というのが実情のところも沢山あります。

私たち NGO にどんな期待をしていらっしゃるのでしょうか？

[K] 私の印象なんですけれども、免疫の方はサービス

がサイクルとして回っていったり、なかなかリピーター的に見えになることはないです。わたしも着任して、あまり違和感なくは相談できていたんですが、福祉制度はある程度限られてしまっているの、で、だいたいの方は一通りの手続きが済むと一段落です。ですが実際にいる人とか関わっているうちに、服薬のこととか、就労のこととか、親にばれないようにとか、聞くようになったんですね。その時に、ケースワーカーだとか保健師だとか、我々が相談できる範囲というのが、ある意味ですごく少ないなと思ったんです。動きにくいとかもあるんです。

それに、もともと私たちの地区は重度の肢体不自由の方が自立生活運動をやっている団体がいくつもあるような土地柄なので、日頃から障害者の団体とはお付き合いがあるんです。私の考えとしては、相談で見えたかたに、行政としての相談をして、「終わりです」みたいな形ではなくて、つないであげるといいうのも大事な仕事だと思っています。比較的早めに関わりあう相談機関なので、その後どうつなげるかというのは重要です。それでぶれいす東京さんのようなところを、実際どういうところなのかと思って伺いました。インフォーマルなサービスだとか、資源だとかを行政も知っておく必要がありますね。もともとは見ず知らずの団体だったりすると思いますけれども、そういったところと行政とのつながりを見極める必要性が大きくなってきているんじゃないかなと思います。

[F] この障害になって相談に見えたとき、Kさんもおっしゃっていたように、行政として指し示す選択肢がそん

なに多いわけではないので、生活の相談ができる場があるときと安心してもらうなと思ました。他の人たちがこういう状況ですよということを知ることができるのも大きいですね。最初に役所に来られたときに、かなり緊



張されていたり、おどおどされていたりすることがあります。それが私たちだけでなく相談するところがあるんです、つながっているところがあるんですよ、いろいろなカードを見せてあげることが、ワーカーとして良いんじゃないかと思います。一つでも多くの手札を持っているなと思ってこちらを訊ねたという感じでしょうか。

[K] ちょうどですね、われわれと年代が近いですが、特に男性の方が多いですね。それで、この障害になって、意を決して障害者手帳を取りに来たとうかたもいらっしやいます。自分のことでもそうですが、役所に行くと緊張するのと同じで、たぶんそういうものがあるんじゃないかと思うんですよ。当事者の方とか、NPOの肩肘はらない、同じ目線というのも必要ですね。

お互い協力というか、つながることが大事ですね。どうぞよろしくおねがいします。今日はお忙しい中、どうもありがとうございました。

## ティーンズ・クリニック@銀座 開始!

女性のための総合外来「ウィミズ・ウェルネス 銀座クリニック」と、ぷ PEPが共同で進めるプロジェクト「ティーンズ・クリニック」が始まりました。毎月1回、午後は無料開放となり、おしゃれなクリニックで、若者たちのHIV予防啓発活動が展開されています。

「ティーンズ・クリニック OPEN!」

いみ

最近では性教育バッシングの影響で学校や保健所からのプログラム依頼も減っているの、で、現場で若者と直接触れ合う機会が少ない。こんな御時世にどうやってHIV啓発をしていけばい



バリ島の雰囲気?待合室です

いのかと試行錯誤している時に、ウィミズ・ウェルネス銀座クリニックと一緒に毎月1回ティーンズ・クリニックを開催しようという話が舞いこんで来た!クリニックのお墨付きで、若者にHIV 予防啓発活動ができるなんてラッ

キー!と、いうことで4月からティーンズ・クリニックがOPEN。

このクリニックはとにかく広い。バリ島の高級エステの雰囲気漂わせた待合室の奥には診察室、内診室、採血室、レントゲン室、マンモグラフィ(乳房専用レントゲン撮影装置)室も完備されている。そしてアロマルーム!ここではアロマ体験もできちゃう。これらの部屋は、対馬院長先生による見学ツアーで全部周れるし、女の子だけでなく男の子も超ハイテクな内診台に乗るチャンスが?!クリニック内に設



クリニック見学ツアー

置されたコンドーム・ピルの展示コーナーでは実際にいろんな種類のコンドームに触れて自分に合ったものを見つけることができるし、ぴあスタッフから正しい装着方法を楽し



HIV 陽性者の手記のコーナーもあります

く且つセクシーに伝授してもらえます。書籍コーナーには婦人科系の本だけではなく、キュートな写真集や詩集も置いてあって自由に閲覧できるし、白い壁には、体や避妊に関するQ&A やおしゃれな映像がプロジェクターから映し出されて、なんとなく眺めてるだけでも知識が増えてお得。他にもHIV予防関連の海外のTVプログラムを流したり、ぷれいす東京が作成したLiving TogetherのHIV陽性者の手記が読めたりと企画満載。

参加料はもちろん無料だし、クリニック内にはハーブティーやお菓子が置いてあるので、ぴあスタッフとおしゃべりしたり、『婦人科』と構えずもっと気軽に、友達やパートナーと一緒に銀座でまったり自由な時間をすごして、そのついでにHIV予防や避妊に関して何かしら自分なりの気づきを発見してもらいたいな、と思う。

「ピアって何？」

～クリニックとの共同作業で気づいたこと～

じっつー

初めて銀座クリニックからこのお話をもらったとき。そりゃもう、うれしいっただけでなかったです。ピアプログラムの依頼は減ってたし、とにかく若い人に接する場所が欲しかったから。ほんと対馬先生ありがとうございます！

はじめにティーンズ・クリニックを「カフェのような雰囲気の中で、性についていろいろ学べる場所にする」って決めたととき、私は、情報提供だけでなく、意見交換もできるような場所にしたいなと思ってた。意見交換つっても、友だちの部屋で菓子食いながらまったり語るような感じの。私自身が、そういう空間でいるんなことに気付いたり、励まされたりしてきたから。

でもそういう空間を作ろうとしたとき、実際にはちょっとだけ難しいと感じるところがありました。ひとつは、クリニックのスタッフの方から、「クリニックの意見も参加者に伝えてね」って言われたとき。ぶーん、PEPは、「自分の経験に基づいた」考えを自分のことばで伝える、っていうのがピアへのアプローチの柱だから、自分の思いとは違う考えを話すのにはちょっと違和感あったし、お客さんと話していて言葉に慎重になってしまったりするんだよね。

もうひとつは、「お医者さん」に私が圧倒されてしまうこと。インテリアとか雰囲気は私にとっては上品に感じられるからか、



コンドーム・ピルの展示コーナー「手にとってみて！」

そわそわと落ち着かなくて、性的話がしにくいなあって感じるときがあるかな。

でもコンドーム・ピルコーナーでは本領発揮できてるって思ってます。「コンドームに抵抗なくなった～」って言ってもらえるとうれしい。お客さんとコミュニケーション取れてるって実感できるし、それがピアスタッフの役割だと思ってるから。

あと今後の課題。何たってお客さんとの信頼関係作り！安心して性について語るのって、信頼関係がないとむりだと思っただけで、時間が短くて信頼関係を築くのがなかなか難しい！でも今回はうれしいことに1年通しての企画だし、じっくりお客さんと向き合える空間を作って行って、「ティーンズ・クリニックに行けば、性の悩みを聞いてもらえる！」って思ってもらえるように、がんばりたいと思ってます。

「ティーンズ・クリニックへようこそ」

ウイミズ・ウェルネス 銀座クリニック院長

対馬 ルリ子

ウイミズ・ウェルネス 銀座クリニックは、女性の検診や健康相談をやっている総合女性外来です。産婦人科、内科、心療内科、乳腺外科、泌尿器科の医師たちが協力して、ひとりひとりの女性が、自分を知り、自分で考えて、自分らしい健康を実現していくためのお手伝いをしています。

ふだん来院される患者さんは、20代から40代のかたが多いのですが、わたしたちは、もっと若い年代の女性たちにも、心配なこと、疑問、検診などのために、気楽にいらしていただきたい、と考えています。もちろん、現在困ってなくても将来のために知っておいたほうがよい知識もあるし、医師・カウンセラーなどとも顔見知りになっておくとうれしいですね。

毎月1回、午後を十代のために無料でクリニックを解放しています。医師やカウンセラーに相談できますし、診察室やアロマセラピールームをのぞいたり、性やこころについてくわしいが PEPのおねえさん、おにいさんとコイバナできますよ。

ぜひ、お友だちや彼をさそっていらしてください。

ウイミズ・ウェルネス 銀座クリニック

<http://www.w-wellness.com/index.html>

問い合わせ：03-3538-1016

# ぶれいす東京 第5回総会・活動報告会 開催

5月28日、豊島区立生活産業プラザにて、特定非営利活動法人ぶれいす東京の総会・活動報告会が開催されました。活動報告会には63名が参加して、今年もまた充実した会となりました。

まず、第5回目となる総会は、例年通り粛々と執り行われ、年度報告と会計報告の後、無事承認の運びとなりました。

小休憩のあと、活動報告会が開催されました。池上代表の挨拶に引き続き、恒例の部



受付の様子

門報告。ホットラインを皮切りに、16名におよぶ報告者から7部門の報告が行われました。毎年のことながら刻みみのスケジュールの進行のなか、多彩な報告者から、淡々と或いは熱を帯びた報告が入れ替わり立ち替わり行われました。ぶれいす東京の幅の広い活動内容と、熱心な活動ぶりが伝わる報告でした。

後半は、ゲストコーナー。今年のゲストはPERSONZのボーカル、JILLさん。生島のインタビューに答えて、リスナーの方からHIV陽性であることをカミングアウトされた経験を語ってくれました。本人の了解のうえで、当時やりとりされたメールを朗読。このことが彼女にとってどういう意味を持っていたのかという、とてもパーソナルな部分に踏み込んだ話におよび、さらに、このエピソードをきっかけにして作られた「HIVE」という曲が紹介され、会場は大きな感動にあふれました。

企業や行政など、年々幅広い分野からの参加者も増え、ますます多彩な会場風景となりました。そんな中、以下3名の参加者からの感想を掲載させていただきます。

(報告：矢島)

## 「活動報告会を振り返って」

PGM ファシリテーター せき

報告会は立場上いろいろな見方ができるので、そういう意味でも楽しかったというのが率直な感想。発表については前から時間が足りないと言われていて、前半はまばらだった人数も後半の活動報告になった途端に一気に満員になり、こんなに多くなるなんて聞いてないわ!と思いつつ、これこそ『演技力』の見せ所、そうあれは舞台なのと思いついたのです。結果、80点くらいの出来栄だと自己満足の評価。



満員の会場

また、問題なく仕事をして普通の生活を送り病気のこともアタマから離れることが多い日々の中で、この会に参加したことは、徐々に当然と思いはじめていた自分を日常から引き離してくれた。そしてこんな当たり前の生活を支えてくれている人達、応援してくれている人達の存在に感謝せずにはい

られなかった。PGMを卒業して3年、今度はピア・ファシリテーターとして参加することになったのだが、支える側に足を踏み込んだ陽性者としてできること、やらなければいけないことをもう一度見つめなおすいい機会だったとも思う。ひとりでは些細なことでもそれらが集まればきっと大きくなるなんて、ありきたりな言葉だけれどその『些細なこと』に自分がなれば良いかと、感想文の依頼が来て改めて思う。

## 「ぶれいす東京と出会って」

株式会社ケーシーズ 佐藤真康

私がぶれいす東京さんの名前を初めて知ったのは、日本性教育協会にお伺いしたときにいただいたパンフレットでした。私たちは性教育のデジタルコンテンツを作成しているのですが、そのときに目にしたぶれいす東京のHIV感染予防のパンフレットは、とても洗練されていて内容とともにデザインのよさに感銘を受けたのです。これらを創っている人たちってどんな人たちなんだろう~と率直に思いました。本気でHIV/エイズに関する啓発活動をしていくにはこのようなポップなセンスもとても大切だと感じていたからです。以来、ぶれいす東京さんがどのような活動をしているのか興味がありましたし、代表の池上さんにも是非お会いしたいと思いついて参加しました。

ホットラインから始まった部門報告はどれも穏やかな雰囲気の中での発表でしたが、活動そのものはパワーの入った素晴らしいモノでした。多くの方がボランティアでこれらの事業を遂行していることを考えると、この活動ボリュームはすごい!と思いました。皆さんのハートを感じました。終了後に行われた懇親会もとても有意義なものでした。池上さんと直接お話しでき様々な情報を得ることができましたし、みなさんのあの明るさには圧倒されましたね。

私どももこの出会いを大切に、すこしでもお役に立てるよう、北の大地でがんばります。そんな勇気をいただいた報告会でした。

## 「NGOと行政ができること」

新宿区保健所 保健師 狩野 千草

保健所でHIV抗体検査に従事している保健師です。先輩保健師から引きつづき、NGOの方々には、助けてもらっています。

先日、出かけるついでに、池袋で開かれた、ぶれいす東京の活動報告に参加しました。会場いっぱいの人



PERSONSのJILLさん(右)

に、まずびっくり。参加している方もさまざまな様子。

活動報告を聞き、私の中で、ばらばらに散在していた各部門の活動が、ぶれいす東京というNGOの団体にまとまっていたんだ!とすっきり整理されました。(今更、すみませ

ん。)そして、実際に活動している方々の生の報告が良かったです。緊張しながらも、一生懸命話す様子から、日ごろの活動の様子や雰囲気が良く伝わってきて、温かみのある報告会でした。また、今回の報告会への参加は、保健師として役立てたいという、気持ちが強かったのですが、PERSONZのJILLさんの語りでは、保健師として参加しているというより、もっと、単純に一人の人間としてその場にいるような不思議な気持ちに包まれました。正直今も、あの時間が自分にとってどういうものか、よくわかりません。心に響く体験とは、ああいうものなのでしょうか。そして、心に響いた一

人一人から活動がひろがるとすると、まさに Living Together ですね。

さて、今回感じたもうひとつの事は、NGOのフィールドの広さや活動の自由さです。NGOだからできる特徴なのでしょうが、では、行政としては何ができるか。または、行政だからできることは何でしょう。NGOとの協働と、うたわれませんが、うーん。簡単なようで、いろいろ障害があります。でも、まずは知ること。知り合うことなのでは、ないでしょうか。人との出会いで、次の扉を開かれるように。

## 活動報告他

### 各部門より

## ● ホットライン

エイズ電話相談（ぶれいす東京および東京都委託）

ホットライン・ミーティング他実施状況（ ）内は出席人数

月	日	実施内容	出席人数
4月	8日	東京都電話相談連絡会	3名
	17日	世話人会	5名
		スタッフミーティング/ケースカンファレンス	14名
5月	13日	東京都電話相談連絡会	2名
	15日	世話人会	6名
		スタッフミーティング/ 自主勉強会「陽性者対応について」(講師：生島)	17名
6月	10日	東京都電話相談連絡会	3名
	19日	世話人会	5名
	26日	臨時世話人会	8名

### 相談実績報告

ぶれいす東京エイズ電話相談

	4月	5月	6月
日数(日)	4	4	4
総時間(時間)	16	16	16
相談員数(のべ人)	5	5	5
相談件数(件)	22	25	28
うち(男性)	20	23	26
(女性)	2	2	2
(陽性者)	0	0	0
1日平均(件)	5.5	6.3	7.0

東京都夜間・休日エイズ電話相談（委託）

	4月	5月	6月
日数(日)	12	14	12
総時間(時間)	36	42	36
相談員数(のべ人)	28	32	27
相談件数(件)	207	216	183

うち(男性)	180	172	151
(女性)	27	44	32
(陽性者)	5	6	2
1日平均(件)	17.3	15.4	15.3

性的接触による不安の相談と神経的な問題を抱えている相談が大きな2つの柱になっています。相談内容は感染不安が中心ですが、検査に関する相談も30%前後の数字を示しています。また迅速検査のガイドライン第二版でのウィンドウ期の変更によって、陰性結果を信じられないという新たな不安を抱える例も生じました。相談員としては、相談者の不安を受け止め、誠実に対応していきたいと思えます。また5月の自主勉強会は、スタッフのスキルアップにとっても役立つと思えます。

(報告：佐藤)

## ぶ☆PEP

若者による若者のための予防啓発活動

ミーティング（ ）内はぶ☆PEP参加人数

4月 9日	ティーンズ・クリニックミーティング@事務所
4月 18日	ティーンズ・クリニックミーティング@事務所 (2名+兵藤)
5月 11日	ティーンズ・クリニックミーティング@事務所 (3名+兵藤)
5月 17日	ティーンズ・クリニックミーティング@事務所
5月 24日	ティーンズ・クリニックミーティング@銀座クリニック (1名+兵藤)
5月 30日	ティーンズ・クリニックミーティング@渋谷(2名)
6月 19日	ティーンズ・クリニックミーティング@ルノアール (5名)
6月 22日	ティーンズ・クリニックミーティング@渋谷(2名)
6月 28日	ティーンズ・クリニックミーティング@事務所 (2名+兵藤)

ティーンズ・クリニック実施状況（ ）内はぶ☆PEP参加人数

4月 17日	(4名)
5月 15日	(4名)
6月 19日	(6名)

その他

6月30日～7月1日

エイズ予防財団ボランティア指導者研修会参加(1名)

メール相談

4月 0件 (女0件 男0件 不明0件)

5月 0件 (女0件 男0件 不明0件)

6月 1件 (女0件 男0件 不明1件)

4月からティーンズ・クリニックがスタートしました。途中から新人さん2名がスタッフとして加わったこともあり、会を増す毎に内容が濃くなっているように思います。詳しくはp.11。また相談メールについては、例年と比べても相談件数が少なく、アクセスしやすいように環境を整えていく予定です。

(報告:じっつー)

## ボディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

ボディ担当者ミーティング参加スタッフ数

(第1木曜 11:00～ 第3木曜 18:30～)

4/7 3人 4/21 5人

5/12 3人 5/26 7人

(5月は連休のため、第2と第4に変更)

6/2 3人 6/16 4人

利用者数

6カ所の病院に通院中、もしくは入院中の17名の方に19名のボディスタッフを派遣

訪問先(2005/6月末現在)

在宅訪問 12件 病室訪問 2件

在宅への電話のみ 1件 休止中 2件

派遣調整

派遣調整中 1件

ボディ担当中のスタッフ構成(6月末現在)

女性12名 男性7名

ボディの現場から

毎年同じことを書いているのですが、4～5月にかけて年間活動報告書を作成するにあたり、記録をすべて読み直し集計作業を行なっています。毎回気づかされるのは、活動していただいているボディの皆さんの協力のおかげでこの派遣が成り立っている、ということです。いつも定期的な訪問、急な依頼の訪問など、ご協力いただきありがとうございます。今後ともよろしく願いいたします。まだまだ担当として力不足の所があると思いますので、何かありましたら、いつでもご連絡ください。

(報告:牧原)

## ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのスペースとプログラム

ネスト利用状況

	オープン日数	延べ利用者数	(うち新規)(*ファシリテーターなど)	
4月	26日	124名	(13名)	(12名)
5月	24日	98名	(8名)	(7名)
6月	26日	155名	(8名)	(7名)

(\*はファシリテーター、web NEST運営委員、お茶会、講習会などの企画・運営などの役割を担っているネスト利用者)

ピア・グループ・ミーティング(PGM)

・新陽性者PGM第22期(参加者5名)

4/7 4/21(修了)

・新陽性者PGM第23期(参加者6名)

6/4 6/18

・陰性パートナー・ミーティング

4/9(3名)5/14(4名)6/11(4名)

・ミドル・ミーティング

4/9(3名)5/14(6名)6/11(8名)

学習会/イベント

・4/2 ネスト庵春のお茶会(参加者4、ご亭主1)

・4/25 ストレス・マネージメント講座2(参加者5名)

・5/22 バーベキュー・パーティ(カップル交流会企画)

(参加者6、幹事4)

・5/23 ストレス・マネージメント講座3(参加者7名)

・6/27 ストレス・マネージメント講座4(参加者3名)

ミーティング( )内数字は各(陽性者メンバー、ぶれいす東京スタッフ)

・新陽性者PGMファシリテーター・ミーティング

4/26(4、5)

・新陽性者PGMマニュアル検討会

6/2(2、2)

・web NEST運営委員会

4/14(2、2) 5/19(2、2) 6/23(2、2)

・ネスト世話人会(仮称)

5/17(1、3) 6/7(1、3)

ネスト・ニュースレター

4/18 4月号発行、5/16 5月号発行、6/20 6月号発行

冊子「ストレスとつきあう」

昨年度行われた陽性者向けwebアンケートの結果をもとに、冊子が発行されました。詳しくは15ページ

ネスト世話人会(仮称)

2004年度に「ネストのあり方を考える会」でネスト利用者アンケートを実施しました。その後の話し合いで、いくつかの具体案がだされ、また、ネスト運営について話し合う場としてネスト世話人会(仮称)が提案されました。その準備会が開かれ、ネストをより居心地のよい空間にするプロジェクトや学習会の企画など、少しずつ動き始めています。

(報告:はらだ)

## Gay Friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動

<http://gf.ptokyo.com>

Gay Friends for AIDS 電話相談

4月 13件(平均2.6件)

5月 11件(平均2.75件)

6月 8件(平均2.0件)

NLGR2005にLIVING TOGETHER、LIVING TOGETHER LETTERSを提供(6/11 12)

kavcaap2005「未来のドキュメント」にて、日本のHIV陽性者やその身近にいる人たちへのインタビュー映像「POSITIVE VOICES」を上映(6/30 7/3)

携帯サイト、年内にリニューアルアップ予定

VOICE'05 開催日、11月26日(土)に決定!

多くの人に楽しみながらHIVについて考えるきっかけをもって欲しい。そんな思いで、今年もVOICEが開催されます。出演者もほぼ決定し、当日に向けて着実に準備を進めています。今年もご期待あれっ!

日時:11月26日(土) 17:30~20:30(17:00会場)

場所:四谷区民ホール

(報告:タカシ)

## HIV陽性者への相談サービス

相談実績 2005年4~6月

2005年	4月	5月	6月
電話による相談	43	28	48
対面による相談	34	33	60
E-mailによる相談	68	80	97
うち新規相談	16	14	13

新規来訪者情報源(N=43)

web:15

他団体:5

冊子・雑誌:3

他の陽性者の紹介:3

電話相談:2

パートナー(含む、元):2

保健所・検査所:2

看護師(コーディネーター):2

母親:1

知人:1

医師:1

カウンセラー:1

障害者職業センター:1

不明:4

新規相談者の属性(N=43)

HIV陽性者:36(男性:34、女性:2)

パートナー(含む、元):4

母親:1

妻:1

判定保留:1

4~6月新規相談内容

- ・免疫が低いのが就労継続は大丈夫か?
- ・福祉職/医療職が大丈夫だろうか?
- ・身体をつかう就労なのだが、大丈夫か?
- ・公務員だが、手帳をとると上司に報告が必要か?
- ・経済的な問題を抱えているがどうしたらいいか?
- ・告知直後の医療機関の選択について、紹介先に対する不安。
- ・迅速検査で判明したが、医療機関はどうしたらいいか?
- ・告知後の性生活をどうしたらいいか?
- ・生命保険についての相談。
- ・海外にいるが、帰国後の生活はどうなるのだろうか?
- ・これまでの告知、医療での居心地の悪さを聞いて欲しい。
- ・周囲の人からの相談(母親、パートナー(含む、元)夫)。
- ・パートナーの発症で自分も調べると陽性だった。
- ・ボジの友達の話聞いて、かえって不安に。
- ・感染経路の違う陽性者と話してみたい。

・誰にも会ったことがない。少し情報を増やしたい。

・大量服薬、その後の相談。

・自分は病気と向き合うことを避けてきたが、ようやく。

(報告:牧原/生島)

## 研究部門

厚生労働省委託 厚生労働科学研究

「HIV感染予防対策の効果に関する研究」(2003年度-)

研究年度3年目の継続が決まり、最終年度として動き出しました。4月早々に検討会議を行い、教材パッケージ作成・地域でのクリニック予防介入実践・人材育成・陽性者による直接的啓発活動と陽性者のQOL調査・陽性者による周囲への告知に関する調査など、今年度の計画について話し合いました。このうち、人材育成事業としては昨年度同様、「性教育のための実践セミナー」を(財)日本性教育協会と共催しますが、今年度は年明けの2006年1月28日(土)29日(日)、2006年2月18日(土)19日(日)の日程で、2日連続×2回を実施予定です。

なお、当研究班の2004年度の研究報告は、ぶれいす東京2004年度年間活動報告書のp.49-52に掲載されています。

「HIV感染者の地域生活支援におけるソーシャルワーカーの連携に関する研究」(2003年度-)

「HIV感染症の医療体制に関する研究班(厚生労働科学研究)」の中の「HIV感染者の療養生活と就労に関する研究」の研究結果につき、分担研究者の小西加保留教授(桃山学院大学)に協力して作成した報告書を、ぶれいす東京2004年度年間活動報告書のp.53-59に掲載しました。

(財)エイズ予防財団助成 研究成果発表会

『知識から意識へ～HIV予防介入の実践とその評価～』

上記厚生労働科学研究「HIV感染予防対策の効果に関する研究」の2004年度の成果より「若者の性の健康」をテーマに、広く市民の方々に向け発表する催しです。第一回の開催は、7月の神戸での第7回ICAAP(アジア・太平洋地域エイズ国際会議)に併せて行われました(関連記事:p.3ご参照)。第二回の発表会として、熊本での日本エイズ学会開催に併せ、来る12月2日(金)18:50-20:30時に熊本市市民会館においても同様の催しを行う予定です。

第7回ICAAPでの「スキルズ・ビルディング ワークショップ」開催

上記厚生労働科学研究「HIV感染予防対策の効果に関する研究」の2004年度の内容のうち、特に「自治体における当事者性を生かした取組の研究」及び「感染者と周囲の告知・被告知経験に関する研究」の成果を応用して、参加型ワークショップ「地域のエイズ対策にHIV陽性者や若者の視点をどう導入するか」を行いました。当ワークショップは第7回ICAAPでの研究発表として、陽性者の手記を使った手法にて行われましたが、80人超の参加者を得て会場は満杯、地域の保健関係者などからの強い関心を窺わせる結果となりました(関連記事:p.4ご参照)。(報告:吉田)

## 制作物のご紹介

ぶれいす東京では、HIV/AIDSの予防やケア活動をはじめ、その他幅広い活動内容を知っていただくために、さまざまな印刷物やグッズを制作しています。あらたに加わったラインナップをご紹介します。

### 2004年度 年間活動報告書



ぶれいす東京の一年間の活動内容がこの1冊にびっしり詰まっています。

サイズA4判 / 60ページ / 1部1000円

(2000～2003年、各年度分の活動報告書もあります)

### Living Together Our Stories



新発売！ Living Together LETTERSに続くLT第2弾。19人の手記とカラフルな写真でつづる“わたしたちの物語” Sexual Healthコラムもついています。学校、家庭、職場で活用できるすてきな教材です。

サイズA5判 / 36ページ / 1部700円

### ストレスとつきあう



2004年9月に行われた「治療に伴うストレスのコントロールに関するweb調査」を中心にしてまとめられたもので、106人のHIV陽性者の回答の集計と自由記述、そして陽性者自身が行うことができるストレス・マネジメントに関するヒントなども盛り込まれています。長期療養とストレスについて考える上での資料としてお役立て下さい。(発行:日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス/ぶれいす東京)

サイズA5判 / 36ページ / 1部500円

事情に応じて個別に無料頒布することがあります。

詳しくは事務所までお問い合わせください。

### Living Together LETTERS



HIV陽性者やその周囲の人によって書かれた手紙集。手書きの文字から、それぞれの書き手の思いがリアルに伝わります。ゲイ/バイセクシャル向けに制作されました。

サイズB5判 / 20ページ / 1部500円

事情に応じて個別に無料頒布することがあります。

詳しくは事務所までお問い合わせください。

購入をご希望の方は、ホームページの「制作物」販売物一覧 (<http://www.ptokyo.com/main/hanbaibutu.html>) から印刷物等注文票をダウンロードしてご注文いただくか、事務所にお問い合わせください。

ボランティア募集！ あなたも活動に参加しませんか  
HIV/AIDSの問題に取り組むNPO法人ぶれいす東京では、活動に参加して下さるボランティア・スタッフを募集しています。今  
回募集するのは以下の通りです。

1. HIV 陽性者のサポート活動
2. エイズ電話相談の相談員
3. 若者向け予防啓発活動「ぶ PEP」のスタッフ
4. ゲイ向け予防啓発活動  
「Gay Friends for AIDS」のスタッフ
5. Web デザイナー / イベント企画・運営
6. その他

興味のある方は、まずはオリエンテーションにご参加ください。  
活動に参加する・しないは、オリエンテーション終了後に決めても  
かまいません。

ただし、スタッフとして参加を希望される方は、その後に行われ  
る3日間の基礎研修を受講し、修了後必ず活動に参加できる方とさ  
せていただきます。

研修では、多才な講師陣の個性的な講義やワークショップを受講  
できます。ご期待ください。

お問い合わせ・お申し込みは、ぶれいす東京事務所まで  
TEL 03-3361-8964 FAX 03-3361-8835  
E-mail info@ptokyo.com

ぶれいす東京より 賛助会員入会・寄付のお願い

HIV陽性者の数は年々増え続けています。新たな治療法は開発さ  
れていますが、治療を続けながら生活する上では様々な問題が発生  
しています。HIV 陽性者とその周辺の人たちへの支援、コミュニ  
ティとして取り組んでいる予防活動等、私たちの活動へのニーズが  
ますます高まっており、必要な運営資金も増え続けています。より  
よいサービスやプログラムを継続するために、ぜひ私たちの活動を  
応援してください。

賛助会員入会のおお願い  
継続して応援して下さる方は賛助会員になってください。

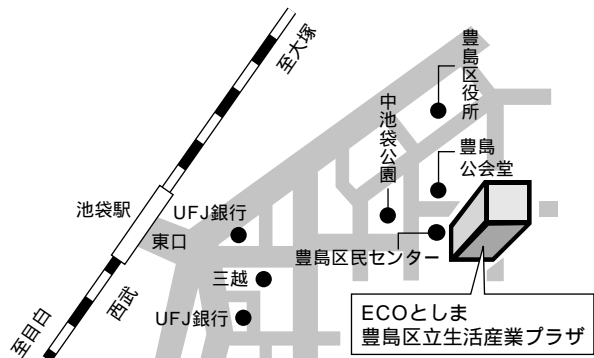
--- 賛助会員になるには？ ---  
メールか電話/FAXで賛助会員入会をお申し込みください。折り返  
し、ぶれいす東京の案内と賛助会費専用の振込用紙をお送りします。  
E-MAIL info@ptokyo.com  
電話 03-3361-8964 FAX 03-3361-8835  
年会費 個人賛助会員（一口） 1万円  
団体賛助会員 （一口） 10万円

編集後記

- ・ “それいゆ”って、フランス語で「太陽、ひまわり」という意味だっ  
たんですね。名称とかで使われてる場合が多くて、ちょっと気にな  
ってました。（こんどう）
- ・ 子供の頃「台風一過」って「台風一家」だと思ってました。嵐のよ  
うな大家族をイメージして……。（やじま）
- ・ 夏が終わりかけている。祭りが終わった後、次は何に向かうのか。  
静かに思いをめぐらせる秋がやってきますね。皆様。（いくしま）

オリエンテーション  
オリエンテーションに参加希望の方は事前にメールまたは電話で  
事務所まで必ず一度ご連絡ください。

日時：9月3日（土） 14:00～16:00  
（受付は13:45より）  
会場：豊島区立生活産業プラザ 8F 多目的ホール  
豊島区池袋 1-20-15  
（JR池袋駅東口より徒歩7分）



合同研修会  
日程：9月11日（日）10:00-16:00  
9月19日（月・祝）10:00-16:00  
9月25日（日）10:00-16:00  
会場：すべてオリエンテーション会場と同じ

研修内容の詳細については、オリエンテーションにて説明を行いま  
す。

研修に参加したいけど、オリエンテーションに参加できない、ま  
た都合でどうしても全日程は参加が難しいが活動したい、とい  
う方は事務所までご相談下さい。

寄付のお願い  
そのほか随時寄付をお受けしています。ぶれいす東京の活動をぜ  
ひともご支援ください。ご寄付はいくらでも結構です。匿名でも  
可能です。

--- 寄付の振込み方法 ---  
ぶれいす東京の活動全般に対する寄付  
郵便局 郵便振替口座 No.00160 - 3 - 574075  
特定非営利活動法人 ぶれいす東京 代表 池上千寿子  
銀行 三井住友銀行 高田馬場支店 普通 2041174  
特定非営利活動法人 ぶれいす東京 代表 池上千寿子

HIV 陽性者への直接支援活動「ネスト / バディ」への寄付  
銀行 東京三菱銀行 高田馬場支店 普通 1314375  
特定非営利活動法人 ぶれいす東京 代表 池上千寿子

Gay Friends for AIDS の活動への寄付  
銀行 みずほ銀行 高田馬場支店 普通 5507255  
特定非営利活動法人 ぶれいす東京 理事 生島 嗣

編集・発行: 特定非営利活動法人 ぶれいす東京  
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-22-46 ザ・テラス304  
TEL: 03-3361-8964 (月・金 12:00～19:00)  
FAX: 03-3361-8835  
E-mail: info@ptokyo.com  
ぶれいす東京HP: http://www.ptokyo.com/  
Gay Friends for AIDS: http://gf.ptokyo.com/  
web NEST: http://web-nest.ptokyo.com/  
Sexual Health: http://shw.ptokyo.com